

鹿兒島正記卷之四

西野古海編輯

官軍  
御出陣  
之圖

鹿兒島正記卷之四

A438

010190507888

48-7913





とて七人ハ  
兼て三傑  
稱して尊戴  
セ一處  
故薩  
人ヲ持論  
言

◎ 三傑皆  
我頭首  
河村也且  
事を起  
必我



因云薩州にて  
篠原の正兵衛  
奇兵桐野の遊兵

月...



味方の者

あり河村

既に味方

を海軍の

全推ハ我有あり

と自信一事を舉

幸よ河村大輔ハ

林内務少輔共 薩海

赴くを以て賊徒を足



幸よ河村君

を上陸

させ

んとて

如斯の始末

及びくりと云

斯て暴徒

へ又別隊を

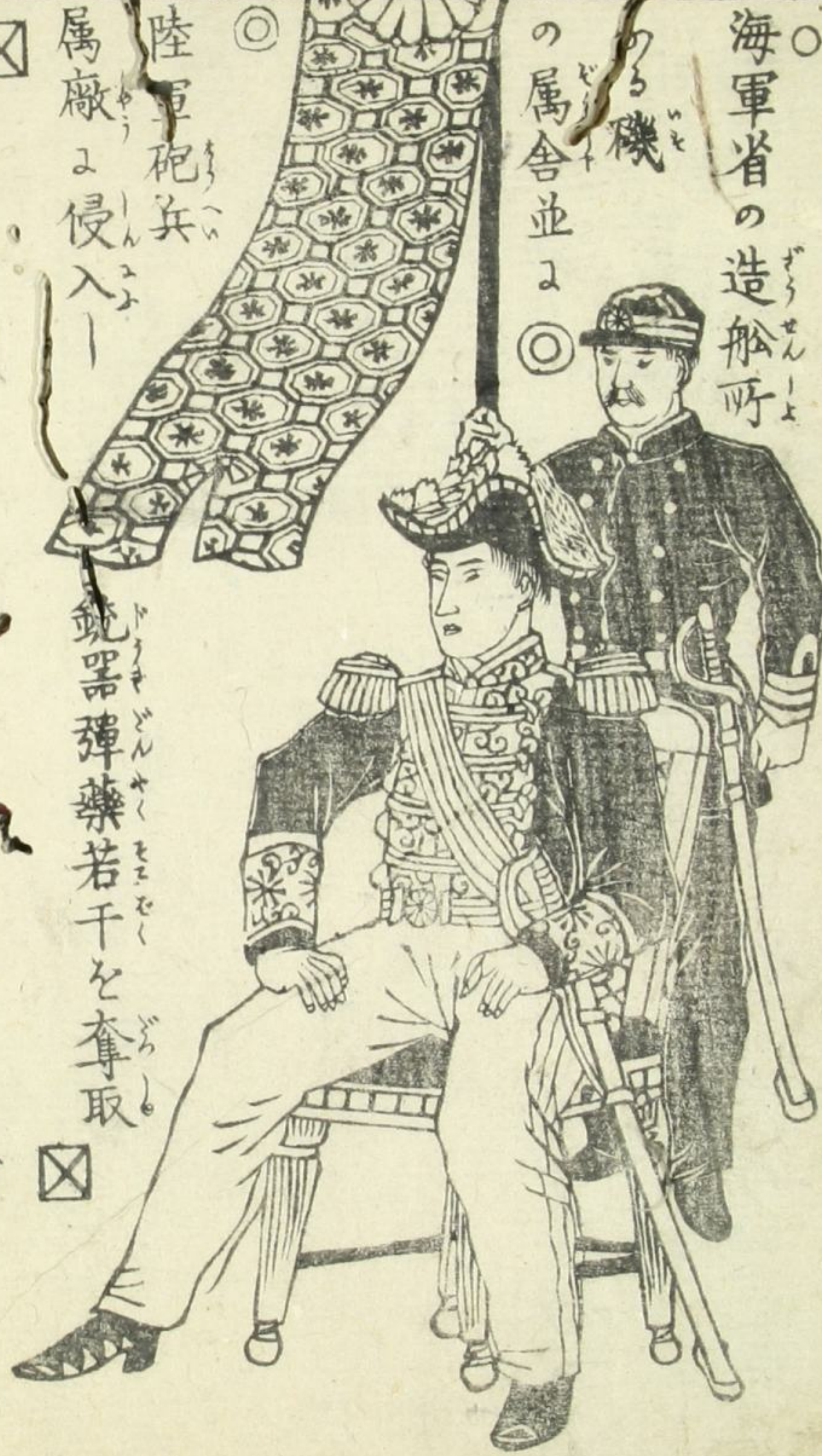
出一同縣下





○海軍省の造船所

の属舎並に○



◎陸軍砲兵  
属廠に侵入し

銃器彈藥若干を奪取

⊠ 現今同所は在り銃器、スライドルの元込が千五百

挺と其外小銃三千挺都合四千五百挺あり大砲を四門有

是を先年政府より取立ふあり一時を田舎より取りて全

見落し分りたりと其他ミニユート銃ハ夥くありと

この是に於て賊徒を本城を根據とす國境の口々へ出

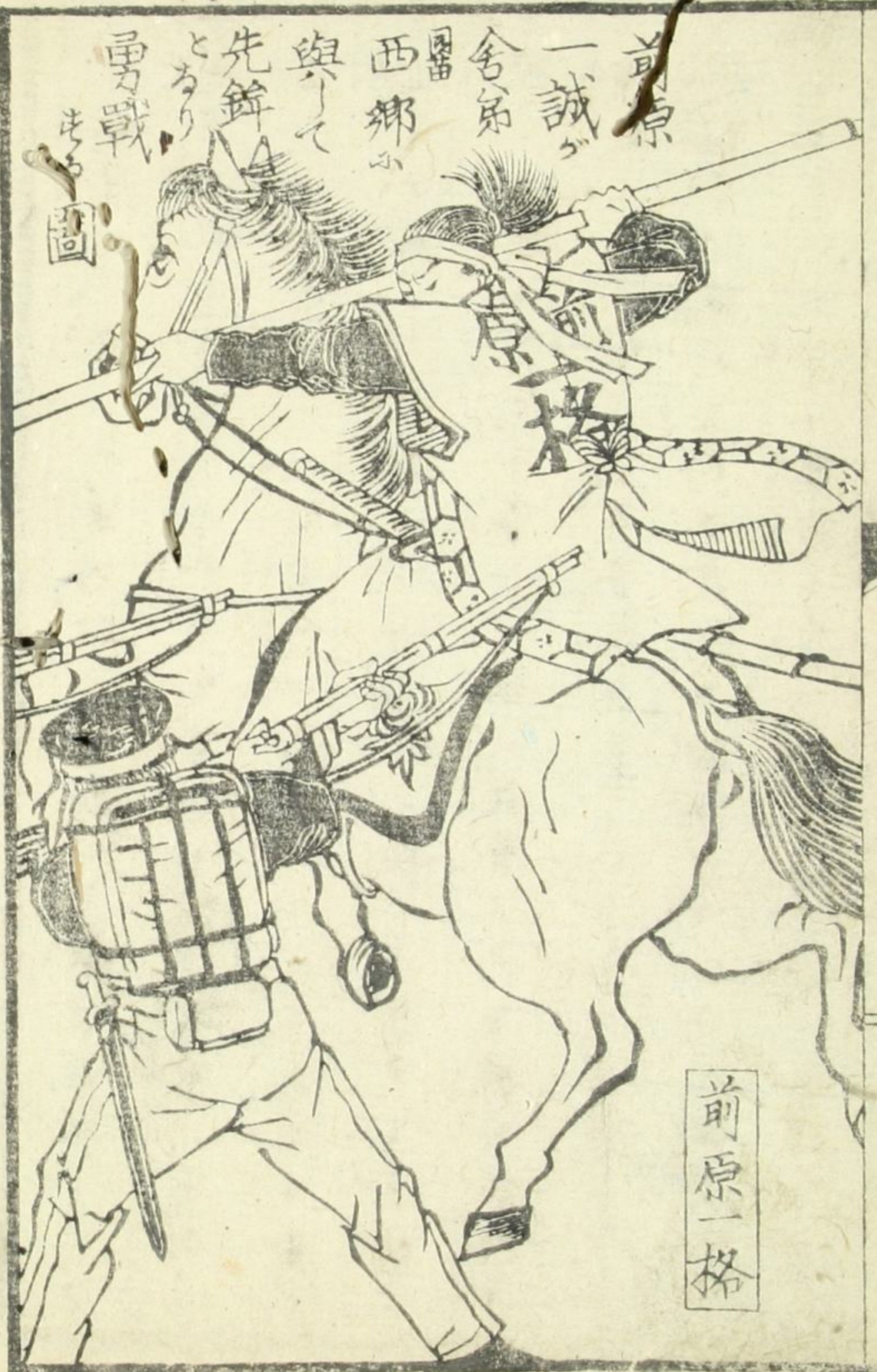
て要害を固め内外の旅人も一切通行を許さず直に撃

て出せと思へど素より無名の師故何と名義を設て

出む者と評議まちの處西郷隆盛の舎弟小兵衛(此程

死しとも軍議の席へ進み出て異見を陳ぶるや





前原一格

前原  
一誠  
舍弟  
西郷  
與  
先鋒  
勇戦

も一今度一舉ハ孤軍を以て全國の大敵ニ抗抵せんき  
 一大事なれど虚形を志めして實体を隠し策畧こそあり  
 きば一けさされバ一騎當千の精兵二千人をかりもまぐ  
 り出し海路より長崎ニ航海せしめ夜まぎきて不意ニ  
 上陸し一隊を縣廳を襲ひ一隊ハ兵營ニ火を掛けて砲臺  
 と乗取らむ一鼓し長崎をおとししんこれハは  
 り迅雷耳を掩ふも及ばざるの妙訣なりととひ破泊の軍  
 艦ありといへども應援もりのいとまわりもべりすか



のごとくならず時を敵軍の進路を遮断し上國の通信を止  
 る外金穀彈藥等もほと十分一分捕りせらるべし此報  
 知熊本は達し方は鎮臺より援兵を繰出さハ必然なり其  
 時又當り陸路より急兵を進めて鎮臺の空虚を擣らば  
 熊本の城もまた一鼓しておとしめしめ小かたからず長  
 崎熊本の両所我有とをうたを西肥ハつふ及ぶ中筑豊の  
 諸國とも小響きのらとく小相應し九州一圓ハ檄を傳へ  
 て定むし九州既定らば全國震動して東北の諸國又





も我々應もるも此をとりつふべからず然る時を政府を  
照右願ふといまめつたすして我を討つ大兵を擧ること  
能はず上國迄長驅せんも心のまゝなるべけれど檄文を  
贈るの使者を立るをどしよ迂拙あることをやめて今我  
陳る神機妙算を用ゐられよと憚る所も亦く述べたる  
は叛賊等が運の尽きうる所ふや我等大軍を引率して東  
上とと聲言するふおらそハ蘇本の鎮臺ハ聞きおぼして  
潰散し一彈丸を費さずして熊本城ハ陥るべし且つ海軍

ハ我長門の所よりわらわして長門の寡兵を以て守るべき  
地より十萬一海軍のよめ取返さるること所は我  
兵氣を沮喪して再び挽回をべからず全軍を擧て陸路よ  
り進むの安全なる小若りごとて兄隆盛始め更上許容の  
色ふければ小兵衛も今いふとも詮なくと黙して再び  
言を發せさるりと然る小其師の名あきを患ひ俄に一  
術を思ひつき明九年より布教取締の為出張ありし一  
向宗の僧大洲鏡然を始として暉峻普瑞山崎照大森門松

長門の所よりわらわして



著香川嘿識小池行運龍澤謙致龍川賢原等八名の僧を捕縛し汝等ハ木戸從三位の内命を受け縣下の事情探偵の爲に來り政府に内應する者ありんとて警察第一分署に拘引して糾問を是より先少警部中原尚雄帰省致しつるを賊徒等ハ天の美賚と大に悦び二月二日の夜に中原以下四十名を捕縛し慘酷に拷問せしめ強迫して西郷刺殺の口供に拇印させしめ其縛されし人々ハ少警部中原尚雄中警部園田長照同菅野井誠美權中警部末廣直

少警部安樂兼道同土持高權少警部高等親章一等巡查樋脇賢助二等巡查西彦四郎伊丹親恒四等巡前田素志高橋為清松本兼清書生半田七拍田盛文田中直哉山崎基助大山綱助猪鹿倉保等あり其口供の書に曰

口供之書ハ治編ニ記

鹿兒島征記卷之四大尾





明治十年四月十二日御届  
 發兌明治十年九月

編輯者 西野古海

第四大區一小區錦町丁目十五番地

東京

出版人 木村文三郎

書林

第一大區十二小區馬喰町二丁目一番地



鷲縣管下

甘牛部

樓尾武